

令和7年度 鳥取大学入学者選抜試験問題

(後期日程)

総 合 問 題

(地域学部 地域学科 人間形成コース)

(注 意)

1. 問題冊子は、指示があるまで開かないこと。
2. 問題冊子は6ページ、解答用紙は3枚、下書用紙は3枚である。
指示があってから確認し、乱丁、落丁、印刷不鮮明の箇所等がある場合は、ただちに試験監督者に申し出ること。
3. 解答は解答用紙（横書き）に記入すること。
4. 下書、メモ等を試みる場合は、下書用紙又は問題冊子の余白を利用してよい。
5. 解答用紙を持ち帰ってはならないが、問題冊子及び下書用紙は必ず持ち帰ること。

問1 次の文章を読んで、以下の問1、問2について答えなさい。

「障害は個性である」という考えは、総理府編の『平成七年版障害者白書』では、望ましい障害者観としてつぎのように紹介されている。

(障害者と健常者の)「共生」の考えを更に一步進めたのが、障害者自身や障害者に理解の深い人達の間で広まってきている「障害は個性」という障害者観である。我々の中には、気の強い人もいれば弱い人もいる、記憶力のいい人もいれば忘れっぽい人もいる、歌の上手な人もいれば下手な人もいる。これはそれぞれの人の個性、持ち味であって、それで世の中の人を二つに分けたりはしない。同じように障害も各人が持っている個性の一つと捉えれば、障害のある人となない人といった一つの尺度で世の中の人を二分する必要はなくなる。

ここで、障害を個性として捉えようとする意図はつぎのようなものである。すなわち、従来、障害は人間の負の部分と考えられてきた。障害はある種の欠陥や弱点であり、そうしたものはない方がよいとされてきた。しかし、「障害はない方がいい(障害の根絶)」と考えることは、「障害をもった人などいない方がいい(障害をもった人の根絶)」という倫理的に危険な考え方につながる。それは差別を助長し、障害をもった人の人権や生活、社会的地位を圧迫してゆく可能性がある。障害を被っている人にとって、障害はその人の人格のあり方の一部をなしている。あらゆる人がそれぞれの個性を生きているように、障害をもった人も障害というその人独自の個性を生きている。障害をひとつの個性として肯定・尊重することは、倫理的にも正しい。これが障害＝個性論の趣旨であろう。

「障害は個性である」という表現においても、個性という言葉は特長として肯定的に捉えられている。まず「個性」には平均からの逸脱という意味がある。そして、その逸脱を「善きもの」「好ましいもの」として肯定しようというのである。実際、『平成七年版障害者白書』をまとめた小池将文は、「障害を、ない方がいいものと否定的にとらえるだけではなく、前向きに受け入れる発想も必要ではないでしょうか」と述べ、「障害をプラスの特徴」と位置づけている(小池1996)。

もしも障害を個性とみなすことで、偏見や差別的待遇に変化をもたらすことができ、同時に障害をもった人が積極的な気持ちで人生を歩めるとするならば、この表現を批判する理由はまったくない。しかし問題は、こうした表現がせいぜい障害をもった人に対する眺め方を(しかも不正確に)変化させるだけであり、① 障害をもった人が被っている不利益を改善するにはおそらく何の役にも立たない点にある。

あらゆる障害を、「個々人をそれぞれ特徴づけている社会的に評価される性格」という意味での「個性」として捉えることは妥当ではない。以下、障害＝個性論に反対する理由を述べる。

まず、個性は、何らかのかたちの身体的・心的なふるまいの特性のことを指しているはずである。しかしながら、いくつかの障害はあまりに重く、生活を送るうえでもっとも基本的な能力を奪うものさえある。こうしたタイプの障害はふるまいや活動上の特徴とは言えないし、そもそも生命に関わる危惧もある以上、「個性」などと呼べる類いのものではない。私たちは障害を特定の人に降りかかる困難と考えがちであるが、私たちの多くは障害者としてその生涯を終えることになるだろう。私が障害＝個性論を批判するひとつの理由は、この説が疾病や老化に起因する

障害をまったく考慮に入れていない点にある。障害をもった人は若くて健康であるとは限らない。

第二に、個性はある程度一定で持続性のある性質（たとえば「粘り強い性格」「計算に長けている」など）と見なされているが、いまあげた疾病や老化に障害が起因する場合には、症状は変化する。逆に治療やリハビリテーション、特殊教育によって何らかの改善の見こみがある場合には、障害を個性と呼ぶことは誤りであるばかりでなく問題がある。個性であるなら治療やリハビリなど必要ないはずだからである。

第三に、障害を「前向きに受け入れる」と言うが、障害を個性とみなすかどうかは、本人の態度によって決まる。たとえば、同じく高機能自閉症やアスペルガー症候群と診断される場合でも、その障害を自分の人格に関わる独自の特徴として捉える人もいれば、人格とは無関係な単なる疾患として扱う人もいる。あらゆる障害を個性と呼ぶことは、本人の障害の捉え方の点から考えても適切ではない。

たしかに、あるタイプの障害をもった人が、そうした障害を持たない人とは異なった仕方で生活を営み、それがひとつの生命ないし生活の型(スタイル)として独自性を示している場合がある。たとえば、手話は、話し言葉や書き言葉のいたしかたのない代替物ではなく、独自の様式と表現力をもった別種のメディアである。両腕に運動障害をかかえる人が、稼動可能な腕の部分や足、口を使ってさまざまな生活の用を足しているときに、私たちはある独特の動作の巧みさを印象づけられる。

あるいは、印象派の画家のクロード・モネは、晩年に両眼とも白内障にかかり、1923年に手術する。しかし、視力は以前ほどには回復せず、チューブのラベルを使ってしか絵具の色を識別できないようになった。一度は絶望して絵を描くことを放棄しようと考えたモネだったが、友人や支持者の励ましや支えによってふたたび絵筆をもつようになる。そうしてできあがった彼の絵は、以前の透明感のある明るい色調と比べると、暗く、重く、鈍い色合いのものとなり、以前よりもさらに巨大なキャンバスに描かれるようになる。それらの晩年の作品は、以前の自然の正確な観察から汲み取られたものとは異なり、画家の感情が投影された、自然のメタフォリックで象徴的な表現になったと評価されている。それは、モネの眼が健常であったなら、けっして得られなかった画風であろう。

これらのことが示しているのは、障害をもつことを単純に健常状態の欠損と捉えてはならず、人間は、ある特定の障害をもつという条件のもとで、そしてその条件のもとでしかありえないような、独特の生命の型、運動や動作の型、表現の型を生み出すことがあるということである。私は、この意味において、障害が条件となって独自ある生活が生み出されることを否定しない。それどころか、しばしばそれらを目撃してきたつもりである。にもかかわらず、そうした独自性としての個性を生み出すのは、障害そのものではなく、その障害を自分のあり方の一部として取り込んでしまう人間の全体的な生命力・生活力・創造力なのである。そして、ある条件のもとで、そしてその条件のもとでしかありえなかったであろう生命のスタイルを創造するということは、**◎ 健常者においても同じなのである。**したがって、障害という特性そのものを個性と呼ぶことはやはり適切でない。

出典：河野哲也『<心>はからだの外にある 「エコロジカルな私」の哲学』日本放送出版協会，2006年，pp.166-171（出題にあたり一部省略した箇所や字体を変更した箇所がある。）

問1 下線部①について、なぜ「障害をもった人が被っている不利益を改善するにはおそらく何の役にも立たない」のか、その理由について述べた上で、障害をもった人に実質的に不利益が生じないための具体的な方策についてあなた自身の提案を書きなさい。(600字以内)

問2 下線部②「健常者においても同じなのである」ということについてあなた自身の経験等からいくつか例を挙げながら、300字以内で説明しなさい。

問Ⅱ 以下の3つの図は、子どもの運動・スポーツ実施状況と家庭環境・保護者の意識との関連について示したものである。3つの図とその解説を参考に問いに答えなさい。

子どもに対して運動・スポーツ実施状況を質問して、過去1年間に行った運動・スポーツ・運動遊び種目(実施回数の多いものから順に最大5種目まで)の実施頻度の合計を算出し、その値が0(ゼロ)となるものは「非実施群」、年1回以上週3回未満(1~155回/年)を「低頻度群」、週3回以上週7回未満(156~363回/年)を「中頻度群」、週7回以上(364回以上/年)を高頻度群と設定した。
尚、「非実施群」の該当数が極端に少数であったため、「非実施群」と「低頻度群」を合わせて「低頻度(週3回未満の運動実施)」とし、全体を「低頻度群」、「中頻度群(週3回以上週7回未満)」、「高頻度群(週7回以上)」の3群に分類して分析をした結果が、図1から図3である。

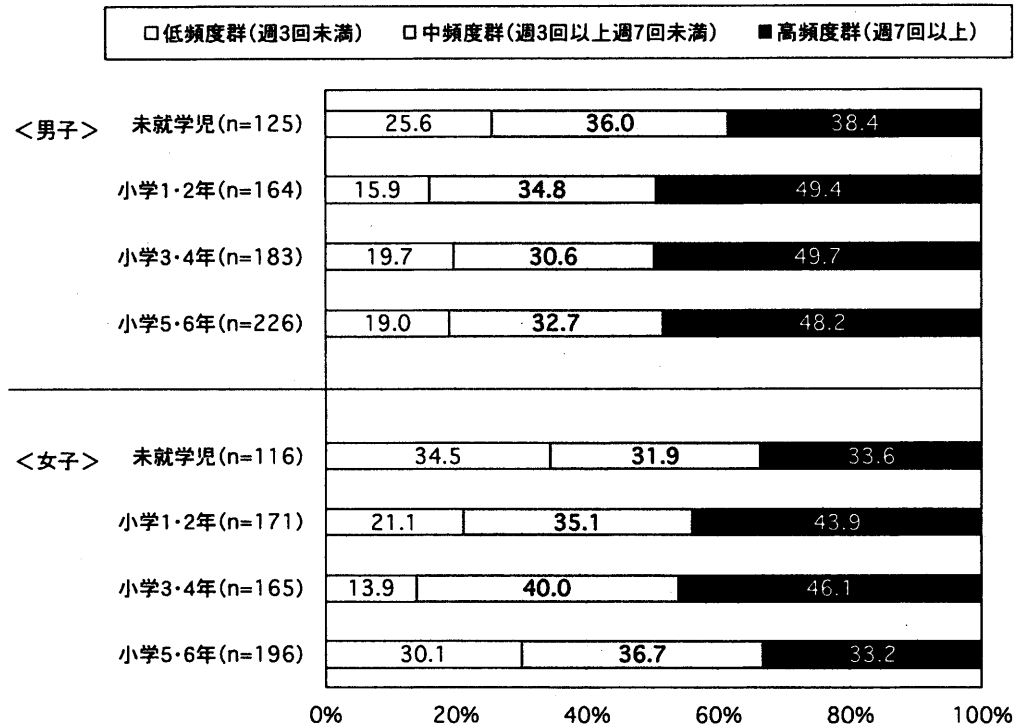


図1 運動・スポーツ実施頻度群(性別×就学状況別)

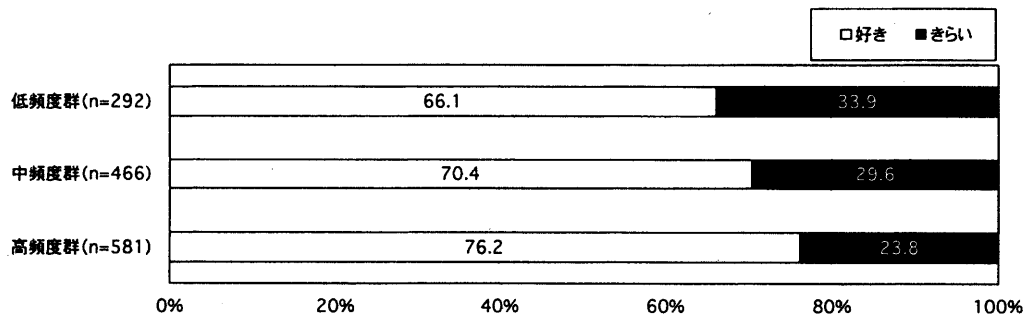


図2 子どもの運動・スポーツ実施頻度群別にみた保護者の運動・スポーツの好き嫌い

保護者に対して「あなたは、運動・スポーツをすることは好きですか」と質問して、「好き」「どちらかという好き」「どちらかという嫌い」「嫌い」の4択で回答を求め、前者2項目を『好き』、後者2項目を『嫌い』とまとめた。

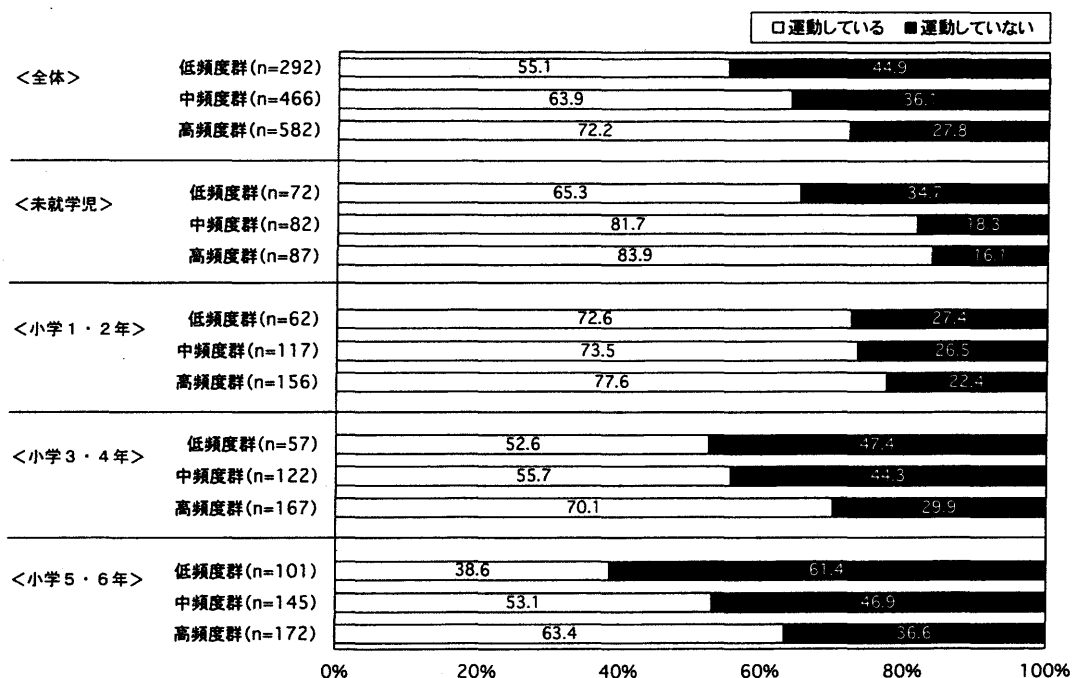


図3 子どもの運動・スポーツ実施頻度群別にみた子どもと家族との運動・スポーツ実施状況
(全体・就学状況別)

保護者に対して「調査をお願いしたお子様は、あなたご自身を含めご家族（お子様の兄弟・姉妹は除く）と、普段、運動・スポーツ・運動遊びをしていますか」と質問して、「よくしている」「時々している」「ほとんどしていない」「まったくしていない」の4択で回答を求め、前者2項目を『運動している』、後者2項目を『運動していない』とまとめた。

出展：『子ども・青少年のスポーツライフ・データ2023 -4～21歳のスポーツライフに関する調査報告書-』笹川スポーツ財団，2023年，PP.12, 31-33, 176-185（一部省略した箇所がある。）

問 3つの図から読み取れることを参考にして、子どもの運動・スポーツ活動と保護者の意識について、800字以内で論じなさい。